

〈片付け〉における絡み合いから見る故郷喪失

——村田喜代子『故郷のわが家』論——

陳 愉 欣

はじめに 村田の「物」とホッダーの「モノ」

九州に根差した作家・村田喜代子(1945-)は、1977年に九州芸術祭文学賞受賞作「水中の声」でデビューを飾り、1987年に短編「鍋の中」で第97回芥川賞を獲った以来、数多くの賞を受賞し、旺盛な執筆活動が続いている。日常と非日常、夢と現実をふわりと去来する「村田ワールド」は、川上弘美らにも影響を与えた。村田文学における先行研究は主に芥川賞受賞作「鍋の中」を筆頭とした短篇、または近年の長編小説『蕨野行』『龍秘御天歌』『姉の鳥』等を扱い、「物」「異界」「棄老」「民俗」「女性表象」「戦争記憶」といったテーマでなされてきた。なかでも「物」に関する論考が多く、村田ワールドに根ざす一種のフェティシズムへの共通認識が認められる。自分の二大創作テーマが「不在」と「部品/物」であると自ら語らった村田は、デビュー以来、鍋や便器のようなありふれたオブジェから、時代風景の凝縮した高炉やタワークレーンといった装置まで、身近でありながら異質性を隠し持つ様々な物を愛でてきた。稲垣足穂や澁澤龍彦らと通底するオブジェ愛の文脈にいなながらも、決して物をただの愛玩対象として捉えないのは村田ワールドの醍醐味でもある。

村田ワールドにおける「物」を再考するべく、本論は注目の少ない『故郷のわが家』(2010)を取り上げる。『故郷のわが家』は旧家の片付けを通して現代における故郷喪失を問う連作短篇集であり、村田の従来の「物」への熱いまなごしを引き継いだ密接に絡み合う九つの「モノ」語りである。短篇集は村田が久住高原に滞在する際「雲海に閉じ込められた神々しい朝の体験」(『故』:あとがき)をもとに、65歳の笑子が母の死後故郷に戻り、古家を片付けつつ過ごした5ヶ月間を描くもので、昭和から平成までの三世代にまたがる物語となっている。物というモチーフの延長線上にありながらも、〈片付け〉という至極単純に見える行為を軸に長編規模の世界観を織りなすのは、これまでの村田ワールドから見てもユニークな試みと言えよう。

『故郷のわが家』に関しては、山本有三による老いる準備という視点の論考があり、上梓された2010年より浮き彫りになった「無縁社会」問題を表象したと見受けられる一方、同じく2010年代に盛んになった「断捨離」やミニマリズムブームを踏まえると、消費社会論の文脈で捉えることもできる。主人公・笑子が故郷に戻る動機は、古物を処分し、古家を売るためである。(片付け)

を原点に様々な「モノ」が絡み合っていく、「モノ」との出会いによって、「故郷」の変容が明らかになっていく。人間と「モノ」の関係への探究においては、短編集はポスト・プロセス考古学者イアン・ホッダー (Ian Hodder) の「エンタングルメント理論」(Entanglement Theory)⁽¹⁾と通底しているとも思われる。

ホッダーの考えでは、「モノ」は関係性の集合であり、人間とモノの間にある一連の依存関係、すなわち「エンタングルメント」は、HH (ヒトーヒト)、HT (ヒトーモノ)、TH (モノーヒト)、TT (モノーモノ) の四種類に要約できる。エンタングルメント理論は、人間のモノ (特に人工物) に対する依存性を強調し、進化には方向性があると主張する。つまり、人間とモノにおけるエンタングルメントは益々複雑になり、モノは益々人間と関わるようになるということ。笑子にとって、古家や古物は本来、手間をかけて処分しなければならない「厄介もの」であったが、それらを片付ける過程が、様々な思いがけない収穫をもたらしてくれた。あらゆるモノが笑子のアイデンティティと家族との思い出の再構築の手助けとなり、無言な道標として彼女に未来の方向性を示す。

予め断っておきたいのは、エンタングルメントにおいては、人、人ではないもの、事件、そして観念さえもすべて「モノ」であり、それらの相互作用が人類世界の複雑性を絶えずに深めていく。ホッダーが人工物に焦点を当てているのは、「モノ」によって導かれる進化の方向性を見出すためである。そういう意味では、エンタングルメント理論においてホッダーの「モノ」と村田の「物」とは同位相である。そのため、本論は従来のオブジェ論の文脈から一步逸れて踏み出し、笑子の〈片付け〉を考古学的過程として捉え、ホッダーのエンタングルメント理論を介して様々なモノとヒトにまつわる絡み合い関係を検討し、「モノ」語りによって表象される故郷喪失を再考する。

第一節 依存の連鎖を辿る一関係性の場としての古家

故郷を偲ぶ夢から始まり、故郷を探す夢で終わる「望郷」は、短編集の基調をなしている。久々に故郷に戻った笑子は、部屋中にあちこち積まれた古物の片付けを始める。「モノ」と「故郷」の関係は、「現代の望郷」の特質に対する考察と密接に関係している。第一話「ラスベガスの男」では、故郷に帰って三日目の笑子が、太平洋戦争中、南シナ海の離島に取り残された日本兵となって崖っぷちに立ち、故郷を思うという夢を見る。彼女は長い間東京で暮らしてきたが、今は夫が脳出血で死に、息子たちは家を出て、両親も亡くなり、そして長兄の一宏は定年間に肺癌で死

(1) 「エンタングルメント理論」は、ホッダーが長期にわたる考古学実践と研究に基づいて提唱したもので、「物の転回」という新唯物論の文脈において、「モノ」によって導かれる生物進化論と社会進化論の間に隠れた第三の道を見出すためである。Ian Hodder. *Where Are We Heading? The Evolution of Humans and Things*. New Haven: Yale UP, 2018を参照。

に、次兄の継二は22歳の若さで腸チフスで亡くなり、末妹の鈴子はイタリア人と結婚してフィレンツェに移住した。時代の変化や死によって、大家族から核家族まで現れる家庭の崩壊から、「無縁社会」における離散や個人の原子化が窺える。現代の便利な交通手段によって、望郷の兵士を前にした「絶望的に遠い距離」とそれによるノスタルジアは解消されたが、それでも認めざるを得ない「故郷喪失」という事実は、「故郷はあっても親のいた時間の故郷に帰ることはできません」と笑子を嘆かせる。現代においての望郷の念は、「時空の壁に隔てられた場所」（『故』：20-21）に寄せるしかない。アンソニー・ギデンズの言うように、近代化によって「遠方」「付近」という概念はなくなった。グローバル化が進む中、時間と空間の分離は個人の離散を加速させ⁽²⁾、「付近」の消滅を助長させる。⁽³⁾「望郷」は特定の地理的座標や社会的関係から切り離されたため、現代人はもはや精神的に放浪し続けるしかない。その意味で、久住高原も古家も、過去の時空を封印するヘテロトピアであり、その存在は土地や建築材料といった物質によって成立しているだけでなく、人々の記憶による再構築にも依存しているため、常に「事実」と相違している。短編集では、高原の故郷を「上界」、東京のような都市化が進んだ地域を「下界」と称する。古家は、笑子を「下界」から「上界」へと、「現在」から想像上の「過去」へと呼び寄せ、空間と時間のリセットを実現する。

高原に戻った笑子は、「全球一故郷一古家」（「原点」としての場所）という、大規模から小規模へのノスタルジアの「焦点化」を体験する。こうして遡ると、その連鎖の果てにあるのは、生まれ故郷である「生家/古家」という原点である。『『昔』には国境がありません』（『故』：94）というように、さらに究極の原点とは、「原初的」な人類発祥の地である。短編集では、恐竜化石の埋葬地や古代王朝の遺跡を訪れた登場人物たちが感じる原始的な体験に焦点が当てられているが、これは集団的なノスタルジアの現れである。起源的な「モノ」である古家は、エンタングルメントにおける複数の手がかりの収束点として機能し、「モノ」の異質性を発揮する。数多くの古物や地名が列挙されることによって、古びた記憶の断片も次から次へと活性化される。

笑子が最初に出会うのは、古家に保管されていた沢山の「ガラクタ」である。「片付け」は、人がモノにもたらす影響を強調する「モノーヒト」の関係だけでなく、逆方向の「ヒトーモノ」の関係をも内包している。モノは人によって手入れされる必要があり、使用者が去った後は劣化して有用性を失い、人はモノを介して過去を辿り、生死を超えた交流を繰り返す。また、戦時中の物資不足による義母の溜め込み癖にも触れている。「分別不可能なほど大量の年代物のガラクタ」（『故』：36）は、笑子の整理過程によって紐解かれていく。台所用品は棚卸しされ、色褪せた衣服は故人の匂いを放ち、こういった「ガラクタ」は脱機能化のプロセスを経て、家族との

(2) A・ギデンズ（アンソニー・ギデンズ）『現代性的后果』田禾訳、北京大学出版社、2015年、15-19頁。

(3) 董山民、趙英『『隣人』の消失と再発明—技術拡張時代の社会連帯再考』『福建フォーラム（人文社会科学版）』第3号、2021年、33-43頁。

思い出を封じた化石として浮かび上がる。「天井に届くような一間筆筒が何棹にもあります。中に入っているのは色の変った紋付き羽織が二十組余り！ それから出征兵士の無事を祈願して女たちが刺した千人針！（初めて見ました）。曾祖父母や祖父母たちの古い着物の山！ 埃をかぶった櫛や簪」（『故』：15）……夥しい遺物は、記号学的に「アーカイブ」と「ゴミ/廃棄物」の間で位置し、記憶と忘却の二面性を併せ持っている。ガラクタの山を解体することは記憶の再構築を意味し、片付けられた「モノ」はエンタングルメントの連鎖を笑子に見せ、故人の顔を思い起こさせ、記憶とアイデンティティの再確認を達成する。

次には、シンボルとしての古家や、墓地の役割を担うその他の場所である。集団で暮らす人々にとって、家は帰る場所であり、死体を埋葬するという行為は、土地のマーキングを実現し、所有権を確保する⁽⁴⁾。墓標や記念碑は、無人の土地に中心を示すことによって人間の存在を告げ、自然を景観化させ、時間を空間化させる。人間の介入によって、世界は「自然な世界」から「人間化された世界」へと変化し、「シンボルとモノの混合物」となり、そこからあらゆる「意味」が生じる。例えば、「砂漠回廊」では、このような中心地は風景の中にあちこちに点在し、様々な人々や出来事を繋がる座標として機能し、さらにはもうひとつの重要なイメージである世界地図によって結ばれる：

ユーラシア大陸がゆっくりと笑子の脳裏に浮んできました（大きなはろばろとした円い月のようです）。そこに引かれた幾筋ものシルクロードの条痕に小さな人影が二つありました。モンゴルのウラバートルからやや下って、荒涼としたゴビに行く一宏兄さんの影があります。

そこから天山北路を西へ下り、キルギス、ウズベキスタンと辿って行くと隣のトルクメニスタンへとつながっていくのです。そこにもう一つの光吉の影がありました。（『故』：55）

……

「この道を行ってわたしの兄に会ったら、よろしく言ってやってください。それから恐竜たちに会ったら気をつけて。でも楽しいことも待っているでしょう。あなたの息子の武さんにもそのうち出会うかも知れませんよ。砂漠に風が吹いています。敦煌から西はさらさらの粉みみたいな砂の砂漠に変わります。美しいタクラマカン砂漠は黄色い海のようです。お義父さん、その辺りで武さんに会ってください」（『故』：57）

笑子は、兄が高校時代に使っていた地理教科書の地図を広げて家族の所在を確認し、その地図を頭に載せて眠り、夢の中でいなくなった彼らのことに思いを馳せることで、幾つかの移動経路

(4) W. J. T. 米切尔 (W・J・T・ミッチェル) 編著『風景と权力』 杨丽、万信琼訳、訳林出版社、2014年、389-390頁。

と形のないノスタルジアを視覚化させ、それらを一つの媒体に呈し、一家の歴史を蘇らせる回想空間をなす。彷徨う者たちは地名と経路によって結ばれている：(1) 笑子の義父である光吉は、陸軍の随員大工として満州国に渡り、シベリアで過酷な日々を乗り越えた後、帰国して福岡に移住した。(2) 笑子が海外ツアーで知り合った斎藤という男は、子供たちの独立と妻との死別から虚しさを抱え、「心の故郷」を探しに世界中を放浪し続ける男である。(3) 笑子自身は、旅の行き先に関しては荒涼とした自然の風景や古代の世界遺産を好み、「原始的」な風景は人間の最も根源的なノスタルジアを呼び起こすと信じている。(4) 笑子の夫・武は定年退職記念に中国のシルクロードを旅行し、帰国直後に病死した。(5) 笑子の長兄は、恐竜マニアである次兄の遺灰をモンゴルにある恐竜化石埋葬地に散骨した。民俗社会とは異なり、現代人の生と死は既にひとつの場所に縛られることはなく、都会での「家」も「心の故郷」とはだいぶかけ離れている。笑子は少数民族のガイドから、砂漠の民族には決まった墓地があり、メンバーは誰しも墓参りの場所を正確に把握していることを知った。対照的に、上記の彷徨う者たちのノスタルジアは、それぞれの心の中にある「原始的」な場所（「原始的」とは、実在する歴史的時間や空間がもはや存在しない中で、現代人が文化遺産を確立するような、構築の産物である）に寄せるしかないため、恐竜マニア⁽⁵⁾、祖先崇拜という形式で浮かび上がる。構築された「原始墓地」は、家族の墓地や固定した住居に代わって、象徴的な故郷となり、生と死の間のもうひとつの「在り処」を示している。現代人は生きながらも故郷を失い彷徨うが、死んだ後もまた、「地上から舞い上がった塵」のように追放され、「今は戻れない地上を恋う」となる。『故』：24)。兄が愛読していた恐竜の絵本や、海を渡る飛行機の機内で「淋しい光を放つ」（『故』：23）世界地図などを媒介として、死者は記憶や夢の中で再び現れる。墓場/「原始的」な風景、故郷/古家、恐竜図鑑/世界地図など、互いに共鳴し合う「モノ」たちは、断片的な記憶や経験を掻き集め、グローバル時代の望郷を演じる。これは、現代における儂い望郷の形を追跡可能にするだけでなく、時空を越え世代間の対話と記憶の継承を可能にする。

第二節 絡み合いを編む—ガラクタ、あるいは古き良きモノ

あらゆる「モノ」は笑子の故郷を想起させ、その原点に基づき、笑子は故郷の「現在」と対話し、「付近」の感覚を再構築することを実践する。家を掃除する一方、笑子は愛犬フジ子とともに高地を散策し、近所を訪れ、民俗社会における定住の地（近代化によって消し去られた「付近」）を拓くプロセスを再現する。想像上の地図から実際の放浪へと、笑子は新たなつながりを築く「遊牧」へと移行し、「モノ」と絡み合いながら、既存のエンタングルメントにも干渉を及ぼす。

(5) 「恐竜」は村田の小説によく登場するイメージであり、この「原始的」な存在への想像力と憧れは、『八幡炎炎記』で幼い頃に両親と死別し、恐竜を父親と認識する衝動に駆られたヒナ子のように、アイデンティティの確認作業である。村田喜代子『八幡炎炎記』平凡社、2015年、188-189頁。

異質性のほか、エンタングルメントは境界性のなさと永続的な流動性という特徴がある。エンタングルメントにおいては、あらゆる実体の境界は相対的であり、実体間のつながりはドゥルーズ的な「塊茎」の形をしており、脱領土化と再領土化のプロセスは常に起こっている。極めて自由で、生と死と時間を超越した夢のモンタージュに加えて、笑子の日常的な活動もまた遊牧民のとみなすことができる。故郷に戻り、「下界」のルーティンやスケジュールから抜け出した彼女は、深夜にNHK ラジオを聴く習慣を身につけ、幼い頃に聴いたことのある「勘太郎月夜唄」という曲に懐かしさを覚える。その歌は兵士となった笑子の夢にも出てきたし、散歩に出かけるときも彼女に口ずさまれている。昼と夜の変わり目に流れるラジオ放送、眠りと目覚めの境目に漂う歌声、そして家に出入りするときの鼻歌は、まさにドゥルーズの言う「リトルネロ」であり、笑子が「夜のしじま」（『故』：17）に抵抗し、安心感と支配感を得るのに役立つ。同じ旋律が何度も流れるにつれて、屋内と屋外の隔たりは柔軟化され、「家」の境界線は笑子が足を踏み入れる地面に広がり、高原はより親しみやすい場所となる。

また、久住高原には養鶏農家の松岡夫妻と、地元で採れた材料から蜂蜜や精油を作る手先の器用な恵子という「隣人」が住んでいる。「青い森、黒い森」では、笑子が昔使っていた「蘭引き」という蒸留釜を見つけ、松枝を集めて精油を作るようになった経緯が書かれている。元々は近代化を象徴する輸入品だった蘭引きは⁽⁶⁾、今ではより効率的な生産道具に取って代われ、日常生活から消え去り、民俗学的な展示品となり、笑子の家では忘れ去られる「廃棄物」となる。精油を醸造する途中、その香りが段々と立ち込め、「部屋の中に鬱蒼と生い茂り」（『故』：135）、故人たちの面影が次々と現れ、人と自然の調和をもたらし、薄れた幼い頃の記憶を蘇らせる。それまで都会に住んでいる笑子は、消費主義が横行する「下界」に生きる「非生産的」なカテゴリーに属する。地元住民と関わり、地元の材料を採用し、蒸留技術を身に付けることで、笑子はその土地の知識を獲得し、故郷の森との親密なつながりを感じる。精油の香りは、歌聲のように、再領土化のプロセスを促し、「付近」の再構築を促進する。

特筆すべきなのは、短編集が久住高原の「付近」における視覚的風景を描くだけでなく、聴覚に基づく「音風景」（サウンドスケープ）と嗅覚に基づく「匂い風景」（スメルスケープ）にも幅広く触れ、それらが織り成す多感覚的な表現の開放性と平等性を強調していることだ。こうした3つの「風景」の融合は、脱視覚中心主義的な主張を示している。視覚は人間が世界を認識する上で最も重要な感覚であり、人間の文化は視覚中心であるため、人間の目で見つめた「風景」ばかりを描くことは、視覚の覇権主義的言説に陥ることになる。対して短編集は、「匂い風景」を構成する遺物に染まった故人の体臭や精油から発せられる森の香り、「音風景」を織り出す屋内での

(6) 「蘭引き」の歴史については、内藤記念くすり博物館「近代化産業遺産認定コレクション〈その9〉らんびき——陶製の蒸留器」、http://www.eisai.co.jp/museum/information/topics/topics14_09.html【2019-7-3】を参照。

ハサミの音、ラジオの音、屋外の自然の音など、視覚以外の感覚の存在を読者に想起させる。多感覚的な風景における表現は、「モノ」と触れ合う体験を豊かにするだけでなく、脱人間中心主義や生きとし生けるものの共生への追求も表す。例えば、「月、日、星、ホイホイ」では、養鶏場を経営する恵子、笑子、ミユキの3人が鬱蒼とした森に野鳥の溜まり場を訪ねる様子が描かれているが、視覚を聴覚に譲歩させることで、言説の主導権がさり気なく非人間へと引き渡される。タイトルは、サンコウチョウの鳴き声が日本語の「月、日、星」の発音に似ていることからつけられている。同様に、アカハラやシロハラといった種の鳴き声も、何かを意味するような日本語文章に「翻訳」され、カタカナで書かれ、長々と羅列され、人間の言説スペースを押しつけている（笑子一行は思わず立ち止まり、耳を傾けて唾然とした）。鳥の鳴き声の連続は、異なる鳥種の競合する生態学的ニッチを視覚化したもので、まさに鳥による「リトルネロ」である。健全な生態系では、種間の生態学的ニッチ関係がダイナミックなバランスを保ち、音風景は調和がとれて秩序があり、明確なヒエラルキーがある。「下界」を埋める人間による騒音とは対照的に、「上界」の鳥の声が演じるポリフォニーは、自然の力と理想的な生態系のバランスを示している⁽⁷⁾。招かれざる客である人間は、人ではないものの力強いシンフォニーを前にもはや畏敬の念を抱き口を噤むしかない。

また、短編集は釈迦牟尼が様々な生き物に生まれ変わるといふ伝説を引用し、人と人ではないものにおいて区別はないという考えを示している。短編集では最も注目される「人―犬」の関係を例にとると、笑子は愛犬のフジ子を家族の一員とみなし、フジ子に衣食住を与え、フジ子は一人暮らしで体力の衰えた笑子の規則正しい生活を維持するのに役立つ。「犬の月」では、笑子がゴールデンレトリバーの万次が人間に生まれ変わり、逆に自分がそり犬に生まれ変わって万次を乗せて夜空を飛ぶという夢を見る。人と犬の絆は、家畜化や服従といった一方通行の支配関係ではなく、お互いの選択と感情の共有から生まれるものであり、人間は動物の犠牲を決して当然視すべきではない。短編集には多くの二項対立関係が書かれているが、強調されているのは、絶対的な相互排他性ではなく、転化し合う可能性である。人、動植物、風景などはすべて「モノ」であり、エンタングルメントにおいては流動性豊かな存在である。それらは笑子と相互作用し、彼女の周囲にさらなる絡み合いの連鎖をあらわにする。五ヶ月の滞在は、人と場所との新たなつながりを生む「塊茎」として機能し、故郷像をより親しみやすいものにする。

(7) バーニー・クラウス (Bernie Krause) は、種間の生態学的ニッチ関係がダイナミックなバランスを保っている健全な生態系では、音風景 (サウンドスケープ) は調和のとれた秩序と層を成していると指摘している。Bernie Krause, *Voices of the Wild: Animal Songs, Human Din, and the Call to Save Natural Soundscapes*, New Haven: Yale University Press, 2015を参照。

第三節 蘇る柳田一縛られし者と〈高原〉の行詰り

故郷探しは、笑子が記憶を思い出し、人脈を再構築する上で喜ばしい結果をもたらしたようだが、「上界」の見かけ上の平穏は、実は物質主義的で暴力溢れる「下界」とひそかに関係している。笑子とフジ子は散歩の途中で厚い雲海に遭遇したことがある。この終末的な光景を初めて目にしたフジ子は恐怖に吠える。それはまるで「人間世界のすべてが水の底に埋葬された」（『故』：85）かのようで、すべての終わりの後」なのか「始まりの前」なのかがわからない（『故』：220-221）という神秘的な風景である。「海」は破壊と再生を象徴し、雲海は曖昧で変わり続ける「上界」と「下界」の境界の比喩であると同時に、地球温暖化による海面上昇を示唆している。地球温暖化は自然災害のように見えるが、実は人禍であり、「上界」をますます脅かしている。人々は安楽なユートピアに憧れる一方、歴史の教訓から目を背け、「高原の家」を侵害し続けるエンタングルメントを前に短視であり続ける。ディペンデントネットワークの複雑さ故に、経路依存症から抜け出すことは決して容易でない。

それではまた、「下界」に注目する。「くらやみ歩行」では、歴史を知らないことに心を痛めた3人の若者が、戦没者の遺骨を収集し、戦争の真実を知るためにグア島に行くことを志願する。しかし、群衆に調査結果を報告している最中に、若者たちのマイクは故障し、演説はオウムの鳴き声に邪魔され、ビデオに撮られた遺骨の焼却場面は「今さら過去を持ち出すのはやめろ」183と叫ぶ農林水産省の役人に妨害される。笑子の夢の中で見捨てられた兵士たちと同じように、暗い過去を象徴する遺骨は、経済発展に気を取られ、平和と繁栄を演じることに熱心な国によって意図的に忘れ去られている。「それらは記憶の深淵に架かる橋であると同時に、記憶の深淵を露呈し」⁽⁸⁾、「正史」の影に潜む認識の断絶を示している。「廃棄物」と化した遺骨を集めることは、埋もれた個人を救い出すだけでなく、深淵に踏み込むことで、禁じられ、消し去れた「過去」を語ろうとする試みでもある。また、「野の輝き」では、動物実験を論じ、科学倫理において探り、人間が自らの利益のために動物を残酷に搾取することを暴いている。「電気の友」では、同窓会で電気会社職員である男性と、銀行員として働いてきた女性が、酔った勢いでそれぞれの「復讐計画」を打ち明け、一方は定年後に東京の大停電を起こすと言い、もう一方は定年前に銀行を襲うと宣言する。これは、長い間資本に異化されてきた人々の「アイデンティティの確認作業」に対する願望を反映している。しかし、彼らの計画はやがて幻となり、笑子がゴジラに変身して東京の街を破壊する夢という形でしか語られない。笑子自身も、夢の中で初めて自己紹介し、旧姓の「柳田」を明かす。「下界」では、消費社会の夥しい人口が過剰な物質を保有し、「上界」の組

(8) ア莱德・阿斯曼 (アレイダ・アスマン) 『回忆空间：文化记忆的形式和变迁』 潘璐訳、北京大学出版社、2016年、53頁。

織的な山焼き儀式で一度「浄化」することができないため、更生を迎えることが難しい。流れた復讐の話は、「ケ／気→気枯れ／穢れ→晴れ」⁽⁹⁾のサイクルを再構築しようとする人々の努力が挫折し、浄化儀式を通して穢れを払い、ストレスを解消することが困難であることを示している。

一方、理想化された「雲上の王国」も同じくエンタングルメントの中にあり、孤立したユートピアではない。笑子は群馬県の赤城山、宮城県の大崎山、愛媛県の石鎚山に住む一人暮らしの年寄りの女性たちとメールを使ってコミュニケーションをとるが、彼女たちが使用するコンピューターやカメラはいずれも近代技術と工業生産の産物であり、浮世離れの山中暮らしも通信ネットワークによって覆われている。彼女たちは山の中で自給自足の生活を送っているが、実際にはテクノロジーによって統合されているのだ。また、笑子が兄たちの部屋はそのままだが、姉妹の持ち物が一つも残されていないのを発見するように、物や権力の分配における不平等は「上界」にも存在する。複雑さが等しい社会では、女性は男性よりも物質的財産が少なく、物質的増長に伴う相応の権力を享受できず、搾取されやすい。家族内の格差は、構造的な抑圧を象徴しており、女性が不利な立場に置かれていることを示している。家父長制は、極端な国家主義や人間中心主義の覇権的言説と共通しており、それによって犠牲となった人々は、構築された神話が天皇であれ、国家であれ、資本であれ、「神話を語る」ことに身を捧げる。「神話」の裏側では、国家に見捨てられた名もなき兵士、古家に置き去りにされたガラクタ、そして名字と持ち物を奪われた笑子が、家族の、さらには国家の構造的な健忘症を明らかにする物証や証人として、共鳴し合っている。

さらに、高原での不気味な体験は、「無限に後退するモノ」を認識することにおける障害を示唆している。神秘的な森や雲海のほか、笑子は散歩の途中で巨大な風車にも出くわした。風車は都会の日常風景とはかけ離れた荒野に立ち、まるで狂った肉挽き機のように鋭い刃で通り過ぎる鳥を肉片へと切り刻み、周囲の環境に不気味な不協和音を与える。風車は人間の技術の産物だが、制御不能のように見え、認識しがたい何かを象徴している。ここで高原は、クァンタン・メイヤスの言う「大自然」⁽¹⁰⁾とみなすことができる。大自然はすべての思考者の外部にあり、認識の盲点に満ちている。高原そのもの、そして雲海、森や風車など、あらゆる認識しようのない物体は、目に見えないハイパーオブジェクトとして、人間界を超えた世界を暗示し、崇高さと恐怖感の混雑するの体験を呼び起こす、技術的合理性の限界を示す。こうしてモノ・ナラティブは、人間が可能な限り「モノ」を認識し、近づきがたい世界に近づくことを助ける一方、認識上の限界が不可避的に存在することをほのめかす。笑子と故郷の間には、常に超えられない障壁が横た

(9) 現代における穢れやケの腐敗と浄化儀礼の再構築については、大塚英志『少女民俗学：世紀末の神話をつむぐ「巫女の末裔」』光文社、1989年、156-169頁を参照。

(10) Quentin Meillassoux, *After Finitude: An Essay on Necessity of Contingency*, translated by Ray Brassier, New York: Continuum, 2008.

わっている。

村田は人々を完全に絶望させるのではなく、「一条の光明」(『故』:83)を高齢者、特に「老女」に射してくれる。「六十五歳」という年齢は、「戦後」という要素を示すだけでなく、人生における特別な段階を示すものでもある。六十歳～七十歳は、現代の日本では定年退職の年齢に相当し、民俗学にいう棄老社会⁽¹¹⁾では、老人が「山へ行く」年齢である。両者に共通するのは、「資源の浪費」や「効率への影響」を避けるために、生理的な老衰によって個人を非生産的と判断し、集団から追放することである。短編「天昇り」や「白い山」では、若者に勝る老人登山隊や、老女だらけの高山の長寿村、老境を迎えて都会を離れ山に帰る女性たちなど、高齢者が率先して自発的に「山登り」をする姿が綿密に書かれている。地球温暖化が進むなか、山はやがて島となり、最後の避難場所となる。老人と子どもはそれぞれ生と死を象徴し、命の環をつなぎ、山はかつての終焉の地から新生の地へと変貌する。村田作品に登場する数多くの「老女」たちは、天災や人禍を乗り越える生命力や、シャーマン的な力を持っており(例えば、『百年佳約』⁽¹²⁾では伝統的な葬式を司り、『姉ヶ島』⁽¹³⁾では海図を描き、難破船を捜す)、人類文明を平和の形で存続させる偉大なる「女神」である。彼女たちは、血縁や親族関係に縛られ、個人の自由を害する可能性のある伝統的な家族制度に回帰することなく、人類を「心の故郷」へと導くことができる。

笑子は、メディアの用語の変化を援用し、現代社会では65歳ないし75歳の女性は「老女」と称されていないことから自分が〈老女〉ではないと何度も主張し、老いを第二の人生の始まりとして捉える。ラストシーンでは、高原を去る笑子はフジ子とともに空を飛び、既に沈没した日本の島々(かつては山地だった)を通り越し、最後の故郷である「島」と化した富士山に向かうという夢を見る。現実では、高原で過ごした五ヶ月は夢のようで、「上界」は静かに閉ざされ、彼女は「下界」の生活に帰らざるを得ない。どこにいても、彼女はエンタングルメントに深く絡め取られ、故郷を探し求め続ける。笑子の夢の中の未来では、人間の生老病死はすべて「山頂」に限定され、散らばった個人はみな「離島」に追いやられ、歴史的体験は古物によって再現される。現実には、笑子は「老い」続け、「高原の故郷」は変わらずひそかに笑子に呼びかけ、「上界」と「下界」との対話の可能性を提示する。エンタングルメントにおける「故郷」や望郷の果てしない変容と再構築の中、「心の故郷」が現代の彷徨う者たちに再び開かれる可能性が潜んでいる。

(11) 「棄老」とは、共同生活の逼迫を緩和するため、あるいは政令によって、生産性のないと見なされる老人を山野に捨て、自活させることを指す。棄老をテーマにした作品としては、柳田國男の『遠野物語』や深沢七郎の『檜山節考』などがある。

(12) 村田喜代子『百年佳約』講談社、2004年。

(13) 村田喜代子『姉の島』朝日新聞出版、2021年。

第四節 おわりに

第三節では、長編小説『故郷のわが家』（2010年）、『姉ヶ島』、『新古事記』におけるプロットについて考察し、村田小説の典型的なシークエンスのひとつが「上山一下山」であることを指摘する。主人公は、ある理由で「山頂」（浄土/上界、概ね高所）に辿り着き、あらゆることを経験してから、やがてその場を去り、あるいは超越し、また「現世/下界」に戻る（あるいは死を迎える）。こうして語り手は、客体と主体の立場を行き来したり、直線的な時空意識や生死を超越したり、共同体を探求したりする。よって、「高所」をめぐる表現が示す村田の創作観と人生観における一貫性が伺える。それはつまり、夢と現実を行き来しながらもこの世に背を向けず、浮かびながら深く生きるということである。

笑子は、「モノ」の呼びかけに応じて「原点」である高原の古家に戻り、考古学的過程を通してあらゆる絡み合いを積極的に探り、「付近」を再構築し、時空を超えた世代間の対話を図りながら「心の故郷」を探し続ける。「上界」と「下界」とは同じく入り交じった絡み合い関係にあり、故郷は結局立ち入ることができず、人類の生存の希望は社会的に拒絶された「老女」にあるのかもしれない。笑子の故郷探しは、「故郷」の発見と再構築であり、そこでは古物や故人が、忘れ去られた過去や消された歴史を語る物証/証人として機能し、経路依存から抜け出す啓示は、〈ガラクタ〉や〈老女〉、すなわちかつて抹消された可能性の中に見出されるかもしれない。それらを踏まえて、〈片付け〉ということは、ただ過去を捨てるだけではなく、複雑なエンタングルメントに入り込み、「モノ」と直に向き合い、そこから解決策を見出すことでもある。

依存関係の連鎖は、過去、現在、未来を結びつけ、異なる空間的・時間的次元におけるノスタルジアの変容は、「故郷」の幻想的性質を明らかにすると同時に、幻想を生み出す仕組みを生かし、経験から学び、発展様式を変えることによって故郷像を更新するという希望をも表している。『故郷のわが家』は、読者に「モノ」の再認識を促し、括弧つきのサブテキスト、オノマトペで記録された人ではないもの言説や、夢と現実の絡み合いによるポリフォニーを紡ぎ出し、原始の風景を発見し、高原や山頂を新生の地として書き換えるといった戦略的な逆転を通じて、「老女」が「新たな歴史」を書き、現代人を平和な未来へと導くもう一つの道を示唆している。

参考文献

村田喜代子著

『耳納山交歓』講談社、1991年。

『百年佳約』講談社、2004年。

『故郷のわが家』新潮社、2010年。

『屋根屋』講談社、2014年。

『八幡炎炎記』平凡社、2015年。

『姉の鳥』朝日新聞出版、2021年。

【日本語文献】（著者名アルファベット順）

伊土耕平「主題と修辞（3）村田喜代子『人が見たら蛙に化（な）れ』の列挙法など（特集 国語学）」『解釈 54（11・12）』2008年11月。

近藤祐『物語としてのアパート』彩流社、2008年。

高野浩「保育者養成における『問う力』育成のための文学教材とその価値：問うことの効果の実感、あるいは村田喜代子『空中区』論」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』2020.16。

川本三郎「台所のジャメ・ヴェ——村田喜代子論」『青の幻影』文藝春秋、1993年。

川本三郎「同時代を生きる視点 一人暮らしの老いの準備 村田喜代子『故郷のわが家』」『調査情報』2011.3。

松岡幸司「文学を通してみる森林文化（1）：『楡山節考』と『蕨野行』」『日本森林学会大会発表データベース』2020年。

松谷美樹「村田喜代子『鍋の中』論——色彩表現の解釈」『千里山文学論集（82）』2009年9月。

鍋島幹夫「食べ続ける女と立ち尽くす男——村田喜代子小説論ノート」『梅光学院大学論集』2010年。

中島賢介「『楡山節考』と『蕨野行』に関する比較考察」『北陸学院短期大学紀要（33）』2001年。

大塚英志『少女民俗学：世紀末の神話をつむぐ「巫女の末裔」』光文社、1989年。

宇野憲治「村田喜代子『鍋の中』考」『比治山大学現代文化学部紀要』1999年。

柳田国男『遠野物語』角川書店、2004年。

山本哲也「現代文学論——村田喜代子の世界（一）」『第一経大論集』1991.21（3）。

山本哲也「現代文学論——村田喜代子の世界（二）」『第一経大論集』1992.21（4）。

山本哲也「現代文学論——村田喜代子の世界（三）」『第一経大論集』1992.22（2）。

【外国語文献】

阿莱达·阿斯曼（アレイダ・アスマン）『回忆空间：文化记忆的形式和变迁』潘璐訳、北京大学出版社、2016年。

A・吉登斯（アンソニー・ギデンズ）『現代性的后果』田禾訳、北京大学出版社、2015年。

陈世华、柳田田「战争与记忆：村田喜代子『伊丽莎白的朋友』中的历史书写」『外语研究』2022.2。

德勒兹、加塔利（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ）『资本主义与精神分裂（卷2）：千高原』姜宇辉訳、上海书店出版社、2010年。

孟悦、罗钢主编『物质文化读本』北京大学出版社、2008年。

日本NHK 特别节目录制组编著『无缘社会』高培明訳、上海訳文出版社、2014年。

尚必武「非人类叙事：概念、类型与功能」『中国文学批评』2021.4。

W. J. T. 米切尔（W・J・T・ミッチェル）编著『风景与权力』杨丽、万信琮訳、訳林出版社、2014年。

肖霞『日本现代女性文学的主题表达与价值取向』山东人民出版社、2016年。

赵毅衡『符号学：原理与推演（修订本）』南京大学出版社、2016年。

周星、王霄冰主编『现代民俗学的视野与方向：民俗主义·本真性·公共民俗学·日常生活』商务印书馆、2018年。

章戈浩、张磊「物是人非与睹物思人：媒体与文化分析的物质性转向」『全球传媒学刊』2019.2。

Bernie Krause. *Voices of the Wild: Animal Songs, Human Din, and the Call to Save Natural Soundscapes*. New Haven: Yale UP, 2015.

Dara Downey, Ian Kinane, Elizabeth Parker. *Landscapes of Liminality: Between Space and Place*. London: Rowman & Littlefield International Ltd., 2016.

Ian Hodder. *Where Are We Heading? The Evolution of Humans and Things*. New Haven: Yale UP, 2018.

Quentin Meillassoux, trans. Ray Brassier. *After Finitude: An Essay on the Necessity of Contingency*. New York: Continuum, 2008.

〈片付け〉における絡み合いから見る故郷喪失

Yi-Fu Tuan. *Space and Place: The Perspective of Experience*. Minneapolis: Minnesota UP, 1977。

【デジタル文献】

内藤記念くすり博物館「近代化産業遺産認定コレクション〈その9〉らんびき——陶製の蒸留器」、http://www.eisai.co.jp/museum/information/topics/topics14_09.html、2019.7.3。

西日本新聞 me「写真特集：戦後75年・モノは語る」、<https://www.nishinippon.co.jp/gallery/monohakataru/>、2020.7.20。